

琉球大学学術リポジトリ

「教職実践演習」授業実践報告： 授業評価アンケート調査を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2016-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 正夫, 廣瀬, 等, Sakuma, Masao, Hirose, Hitoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35626

「教職実践演習」授業実践報告

—授業評価アンケート調査を中心に—

佐久間正夫*・廣瀬等*

Research on Teaching Practical Observance of Practical Seminar for the Teaching Profession -Focusing on the Questionnaire on the Evaluation on Teaching-

Masao Sakuma* and Hitoshi Hirose*

はじめに

本稿は、筆者が所属する教育組織である、琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コースにおいて、「教職実践演習」がどのように取り組まれているかについて、報告することを目的としている。併せて、受講学生が、筆者らが行なった「教職実践演習」の授業を、どのように評価しているかを明らかにすることも、本稿の目的としている。

「教職実践演習」の導入は、中央教育審議会が2006年7月11日に提出した、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（以下、「答申」）が重要な契機となった。「答申」は、教員養成や免許制度の改革の方向性として、大要、次の二つを提言した。

「1. 大学の教職課程を、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせるものに改革する。

2. 教員免許状を、教職生活の全体を通じて、教員として最小限必要な資質能力を確実に保証するものに改革する。」

「答申」は、1の「教員として最小限必要な資質能力を身に付けさせる」ことについて、具体的な方策として、課程認定大学に大学全体としてのカリキュラム改革や、組織編成改革を求めた。「答申」は、2の「教員免許状は教員として最小限必要な資質能力を確実に保証するもの」に関して、

具体的には、新たな科目を設けることなどにより、修了段階で、身に付けた教職の専門的な資質能力を確認できるような改革を要請した⁽¹⁾。

このように「答申」は、各大学の学部段階における教職課程が、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものとなるためには、大学自身の教職課程の改善や充実に向けた主体的、組織的な取り組みが重要であるとしている。また、教職課程で、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせ、それを確認するために、教職課程の中に新たな必修科目を設定することが適切だとした。

以上見てきたように、2006年7月11日の中央教育審議会の「答申」に、「教職実践演習」導入の提言がなされている。この「答申」を受け、提言された事項の法制度化が行なわれ、教育職員免許法施行規則の改正がなされた。「教職実践演習」は、教職に関する科目として新設され、教育職員免許法施行規則第6条第1項の付表：第6欄に規定された。教育職員免許法施行規則第6条第1項の付表の備考によれば、「教職実践演習は、当該演習を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目（教職実践演習を除く。）の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする」とされている。「教職実践演習」を含む教育課程は、2010（平成22）年度入学生からスタートした。「教職実践

* 琉球大学教育学部子ども地域教育教室

演習」は2013（平成25）年度より、4年制の課程認定大学で実施に移された。

筆者が所属する琉球大学教育学部においては、「教職実践演習」が2013（平成25）年度より実施に移され、3年が経過した。教職課程で学ぶ4年次の学生は、この「教職実践演習」を履修し、授業をどのように捉えているのだろうか。「教職実践演習」は、教職課程に新たに設置された必修科目であり、授業科目の趣旨から、4年次の後学期に設定されている。そのため、4年次学生は、「教職実践演習」の履修を負担に感じているのではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、本稿は、筆者が所属する琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コースにおける、「教職実践演習」の取り組みを紹介する。併せて、本稿は、受講した4年次の学生が、「教職実践演習」の授業をどのように評価しているかも明らかにしていく。

1. 琉球大学教育学部における「教職実践演習」の制度的位置と提供方法

ここではまず、琉球大学教育学部における「教職実践演習」の制度的位置づけを見ていく。次に、琉球大学教育学部における「教職実践演習」の提供方法などを見ていく。最後に、筆者が所属する教育組織である、教育学部生涯教育課程子ども地域教育コースにおける、「教職実践演習」の提供方法などを述べていく。

（1）琉球大学教育学部における「教職実践演習」の制度的位置

琉球大学教育学部においては、「教職実践演習」へ向けての予備的な授業科目として、前学期に「教職実践研究」（1単位）が設定されている⁽²⁾。基本的には、この「教職実践研究」を履修済みであることを前提条件に、4年次の後学期における「教職実践演習」の授業登録が可能となる。また、4年次の後学期を迎えた際、学校教育教員養成課程にあっては、卒業要件の免許必須科目を履修済みであること、生涯教育課程にあっては、一つの免許必須科目を履修済みであること、というように、「教職実践演習」授業登録の要件が示されている⁽³⁾。

ここからわかるように、「教職実践演習」の授業登録は、最終学期である4年次の後学期に、「教職実践演習」を除く他の免許必須科目をすべて履修済みであることが前提条件となっている。

（2）琉球大学教育学部における「教職実践演習」の提供方法

琉球大学教育学部においては、基本的には、教育組織である各専修・コースがそれぞれ、所属の4年次学生に「教職実践演習」を提供している。前学期の「教職実践研究」及び後学期の「教職実践演習」はそれぞれ、20クラス開講されている。前学期の「教職実践研究」の履修クラスの授業は、後学期の「教職実践演習」のその前提科目になる。教育学部では、「教職実践演習」は、「教職実践演習（教諭A）」「教職実践演習（教諭B）」「教職実践演習（中・高）」「教職実践演習（栄養教諭）」というように、開講クラスが分けられている。「教職実践演習（教諭A）」と「教職実践演習（教諭B）」は、前学期の「教職実践研究」の履修に際して、学生の免許必須科目の履修状況に応じて、履修クラスが設定されている⁽⁴⁾。

（3）琉球大学教育学部子ども地域教育コースにおける「教職実践演習」の提供方法

「教職実践演習」は2013（平成25）年度、実施に移された。筆者が所属する子ども地域教育コースにおいては、「教職実践演習（教諭A）」が開講され、基本的には所属スタッフ10名全員で、本授業を担当してきている。子ども地域教育コースの学生定員は、一学年30名であり、教育学部の中では、最も学生数の多い教育組織である。また、所属学生の8割から9割は、教員免許状の取得をめざしている。このように学生数が多いことと、「教職実践演習」の「演習」という趣旨を重視し、子ども地域教育コースでは概ね、三つのグループが編成され、「教職実践演習」が提供されてきた。

今年度の「教職実践演習」のグループ編成や、それぞれの教育活動の内容を示してみる。第一グループは、「教育実習生 研究授業検討会演習」である。担当スタッフは4名で、受講学生は8名である。「演習」の概要は、次のとおりである。

小学校教育実習期間中に、自身が行なう研究授業の記録を用い、研究授業現場と同様の場面を再現し、自分の課題を省察する。その後、グループでの議論を踏まえ、新たな研究授業現場と同様場面を企画・実施し、教育計画力及び実践的指導力の向上をめざす。第二グループは、「学校場面ビデオ分析演習」である。担当スタッフは2名で、受講学生は11名である。「演習」の内容は概ね、次のとおりである。主に小学校における学習指導や生活指導の現場と同様の場面を、ビデオ教材を用いることによっていくつか設定し、教職の専門的知見に基づきながら、検討を行なう。その際、討論等を行なうことにより、自らの課題を見つけ、省察する。以上を踏まえつつ、その後、ビデオ教材と同様場面を企画・実施し、学習指導や生活指導における教育計画力及び実践的指導力の向上をめざす。第三グループは、「学社融合実践演習」である。担当スタッフは3名で、受講学生は10名である。「演習」の概要は、次のようなものである。グループを模擬学校（〇〇小学校）の教員組織として位置づけ、それぞれの関係教育実習と連動させながら、一方で、知り合いの現場教員等の協力を得ながら、授業研究や校務分掌の模擬実践を行なう。ビデオ作成や討論等を行なうとともに、研究会等への参加も試みる⁽⁵⁾。

以上から、いずれのグループにおいても、「教職実践演習」という授業科目の趣旨である、教員として必要な資質や専門的な能力の確認にとどまらず、実践力の向上がめざされていることがわかるであろう。それでは次に、実際にどのような授業実践が行なわれたのかを見ていく。

2. 「教職実践研究」「教職実践演習」の授業計画と授業実践

ここでは、公開されているシラバスを基に⁽⁶⁾、筆者が所属する、子ども地域教育コースにおける「教職実践研究」と「教職実践演習」の授業計画と授業実践の概要を述べていく。また、筆者が担当した、「学校場面ビデオ分析演習」グループにおける、前学期の「教職実践研究」と後学期の「教職実践演習」の授業計画と授業実践の概略も述べていく。

(1) 前学期「教職実践研究」の授業計画と授業実践

①子ども地域教育コース全体の授業計画と授業実践シラバスによれば、前学期の「教職実践研究03組」の授業内容と方法は、次のように述べられている。

「教職実践研究では、受講生が各自の『履修カルテ』を踏まえた相互討論によって学びの履歴のポイントをまとめた上で、学校同様場面に関わり、その趣旨に応じて分担する各役割を果たし、活力ある『学校現場』の実現にとって必要なことを確認し合い、補強し合うための実施計画を策定する。学校同様場面は、複数の学校同様場面が設定され、受講生の興味・関心・必要性に応じて、選択される。具体的には、今年度は、1) 教育実習生 研究授業検討会演習、2) 学校場面ビデオ分析演習、3) 学社融合実践演習が設定される。教職実践研究では、教職実践演習に向けて、学校同様場面での実施計画を策定するまでを行い、教職実践演習では、それに基づき学校現場同様場面演習を行う。」

これによると、子ども地域教育コースの前学期の「教職実践研究」における、授業内容と方法の概要は、①教職をめざす学生が各自の履修カルテを踏まえ、相互の討論をとおして学びの履歴のポイントをまとめる、②①によって、学生は自らの課題を把握し、学校現場同様場面演習で、教職に必要とされる資質、能力等の確認を行なう、というように説明できる。

「教職実践研究」の達成目標は、「教職実践演習」のそれと同じものである。教職の意義の理解を初め、子ども理解に基づく学習指導や学級経営力の向上など、「教職実践研究」の四つの達成目標が、シラバスには記載されている。以下では、シラバスから達成目標を示してみる。

「(1) 教職の意義を理解し、教職への使命感を高める、(2) コミュニケーション力を含めた社会性の向上、(3) 子ども理解力及び学校・学級経営力の向上、(4) 教育計画力ならびに実践的指導力の向上、に向けた資質・能力の育成を達成目標とする」。

第1回と第2回の授業については、4年次の年次指導教員が担当し、大要、授業の趣旨やその概略、評価基準、履修カルテの相互点検による

課題の確認、などが行なわれる。第3回目以降の授業では、受講学生は、1) 教育実習生 研究授業検討会演習、2) 学校場面ビデオ分析演習、3) 学社融合実践演習、という三つのグループに分かれ、「教職実践研究」が進められる。それでは、筆者が担当した、前学期の「教職実践研究」の授業計画と授業実践の概要を述べていく。

②「学校場面ビデオ分析演習」グループの授業計画と授業実践

「学校場面ビデオ分析演習」は、2名の教員で担当している。以下に、2015（平成27）年度前学期の授業実践を、配付資料に基づき述べていく。

第1回・第2回：4年次指導教員による授業

第3回：オリエンテーション

第4回：学校現場同様場面演習（1）学習指導場面（体育）

NHK わくわく授業：わたしの教え方「シリーズ授業の達人（3）斎藤喜博先生：『見つめる』ことからすべては始まる」2005年1月20日（木）。

第5回：学校現場同様場面演習（2）学習指導場面（国語）

NHK わくわく授業：わたしの教え方「シリーズ授業の達人（3）斎藤喜博先生：『見つめる』ことからすべては始まる」2005年1月20日（木）。

第6回：学校現場同様場面演習（3）学習指導場面（理科）

NHK わくわく授業：わたしの教え方「シリーズ授業の達人（2）荻須正義先生：理科って楽しい」2005年1月13日（木）。

前学期は、受講学生が教育実習を予定しているという事情を考慮し、学校現場同様場面として、学習指導場面を設定した。視聴したビデオは、上で挙げたとおりである。授業では、このビデオ視聴をとおして、教員として必要とされる専門的な知識や技能等の確認を行なった。毎回の授業の構成は大要、次のとおりである。

- ・受講生は、本日の課題を確認し、ビデオ視聴を行なう。

- ・受講生はビデオ視聴後、課題に基づき、討論を行なう。例えば、第4回の授業の課題は、「斎藤喜博さんの授業実践（体育）から、あなたが新し

く学んだこと、発見したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどを述べてください」というものである。

- ・「演習」という趣旨から、11名の受講生を二つのグループに分け、討論を行なった。

- ・受講生は、討論の成果を発表する。その際、受講生のコミュニケーション力や社会性の向上という観点から、毎回、それぞれのグループの中で討論の司会・進行役、発表者、書記を決め、交代で役割分担を行なった。

- ・それぞれのグループからの報告を受け、新しく考えたこと、疑問に思ったことなどがあれば出し合い、新たな討論につなげた。

- ・以上の討論を踏まえ、受講生はワークシートに取り組み、作成し、期限までに提出する。

- ・次回の授業の際、まず、受講生が取り組んだワークシートの読み合わせからスタートし、前回の授業で確認された知見等の共有を行なった⁽⁷⁾。

以上述べてきたように、前学期の「教職実践研究」における「学校場面ビデオ分析演習」は、「教職実践演習」として、後学期も継続して行なわれる。

（2）後学期「教職実践演習」の授業計画と授業実践

①子ども地域教育コースにおける「教職実践研究」と「教職実践演習」の関係

シラバスによれば、後学期の「教職実践演習（教論A）03組」の授業内容と方法等は、基本的に、前学期の「教職実践研究03組」を踏襲している。「教職実践演習」は「教職実践研究」を履修済みであること、子ども地域教育コースにあっては、一つの免許必須科目を履修済みであること、というように、「教職実践演習」の履修に際しては、前提条件が付いている。

②「学校場面ビデオ分析演習」グループの授業計画と授業実践

前学期と同様に、後学期の「学校場面ビデオ分析演習」も、2名の教員で担当している。以下では、2015（平成27）年度後学期の授業実践を、配付資料に基づき述べていく。

第1回：オリエンテーション

第2回：教育実習を振り返る（1）- 学習指導場

面を中心に -

第3回：教育実習を振り返る(2) - 児童指導場

面を中心に -

第4回：学校現場同様場面演習(1) - 学級崩壊
を中心に -

NHKスペシャル「学校 荒れる心にど
う向き合うか 広がる学級崩壊」1998
年6月19日(金)。

第5回：学校現場同様場面演習(2) - 学級崩壊
を材料に児童理解を考える -

第6回：学校現場同様場面演習(3) - 学級崩壊
を材料に児童指導のあり方を考える -

NNNドキュメント06 子供たちの心が
見えない - 教師、17年目の苦悩 -

沖縄テレビ 2006年9月4日(月)

1:15 ~ 2:10 放送。

第7回：学校現場同様場面演習(4) - 学級崩壊
を材料に児童指導のあり方を考える -

第8回・第9回：発表会に向けての資料等の準備

第10回：発表会の予行演習

第11回：全体発表会

後学期は、受講学生が「教育実習」を履修済み
であること、また、前学期の学習指導場面を中心
にした、学校現場同様場面演習との関連で、まず、
学習指導場面を中心に、教育実習の振り返りを行
なった。次に、後学期の学校現場同様場面演習と
の関連で、教育実習における児童指導場面の振り
返しを行なった。受講生は小学校の教育実習の際、
児童の問題行動に対して、具体的にどのように対
応したのかを紹介することをとおして、教職の基
礎的知識や技能、指導方法等についての確認など
を行なった。

以上の教育実習の振り返りを基に、後学期の学
校現場同様場面演習では、具体的な教育問題とし
て学級崩壊を取り上げ、児童理解や児童指導のあ
り方の確認等が行なわれた。視聴したビデオは、
上に示したとおりである。前学期と同様、授業で
は、このビデオ視聴に基づき、教員として必要と
される専門的な知識や技能等の確認が行なわれ
た。毎回の授業の構成は、前学期とほぼ同様で、
①ビデオ視聴、②討論、③授業後のワークシート
の作成、④次回の授業の際、ワークシートの読み
合わせと知見等の共有、というものである。

3. 本アンケート調査の目的・対象・方法など

(1) 本アンケート調査の目的

本アンケート調査は、筆者が所属する、琉球大
学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コースで
学ぶ4年次学生に対して、「教職実践演習」の授
業評価を行なうことをとおして、4年次の学生が
「教職実践演習」という授業を受講し、どのよう
に評価しているかを明らかにすることを目的とし
ている。以上によって、筆者が担当する「教職実
践演習」の授業を反省的に振り返り、次年度以降
の授業改善の方策を析出することも目的としてい
る。

(2) 本アンケート調査の対象・方法など

上で述べてきた目的を達成するために、筆者は、
本アンケート調査を、筆者が琉球大学教育学部に
おいて、2014(平成26)年度及び2015(平成
27)年度に担当した、「教職実践演習」で行なった。
本アンケート調査の対象は、筆者が所属する教室
における、教員免許状取得をめざす4年次の学
生である。

アンケート調査の実施日は、2014(平成26)
年度が12月5日、2015(平成27)年度が12
月11日であり、いずれも後学期最後の授業日で
ある⁽⁸⁾。アンケート調査票の配付数は、2014(平
成26)年度が21部(受講登録者数は21名)、
2015(平成27)年度が30部(受講登録者数
は30名)である。アンケート調査票の回収は、
2014(平成26)年度が20部(回収率は95.2%)、
2015(平成27)年度が30部(回収率は100%)
である。アンケート調査票は、2014(平成26)
年度と2015(平成27)年度の両年度分を合計
すると、50部(回収率は98%)回収された。

4. 本アンケート調査共通項目の結果と考察

筆者が実施したアンケート調査は概要、次の二
つに分けられる。一つは、本学部で実施されてい
る、「教育学部共通授業評価アンケート」の共通
調査項目と、もう一つは、筆者が独自に作成し、
筆者が担当した、「学校場面ビデオ分析演習グル
ープ」を対象に実施した調査項目である⁽⁹⁾。こ

れら二つのアンケート調査のうち、以下では、前者の共通調査項目である「授業方法・内容及び総合評価」について、2014（平成26）年度のアンケート調査結果と2015（平成27）年度のそれを示し、考察を行なっていく。

（1）2014（平成26）年度の調査結果

以下の1から5までの調査項目に対し、2014（平成26）年度のアンケート調査の回答結果を示したものが、【表1】である。

《調査項目》

1. シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった。
2. 使用した教材は適切であった。
3. 教員の説明はわかりやすかった。
4. 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた。
5. 総合的に判断してこの授業に満足している。

これによれば、上記の「1. シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった」「2. 使用した教材は適切であった」「5. 総合的に判断してこの授業に満足している」の三つの調査項目について、「そう思う」「強くそう思う」という回答は、合わせて80%である。同様に、調査項目「3. 教員の説明はわかりやすかった」「4. 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた」に関して、「そう思う」「強くそう思う」の合計はそれぞれ、60%、70%である。ここから、2014（平成26）年度を受講学生は本授業に対して、全体として見ると、肯定的な印象を抱いていると言えよう。これに対して、「そう思わない」「全くそう思わない」という回答は5%（調査項目5）から、最も多い時で15%（調査項目1、2）の範囲にある。このように、2014（平成26）年度において、

本授業に対して否定的な感想を持っている受講学生は、比較的少ないことがわかる。ただし、調査項目の「3. 教員の説明はわかりやすかった」と「4. 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた」に関して、「どちらとも言えない」という回答がそれぞれ、30%、20%であり、これらに「そう思わない」「全くそう思わない」という否定的な回答を合わせると、それぞれ、40%、30%となる。これらのことから、2014（平成26）年度の授業では、「教員のわかりやすい説明」や「理解を促す教育方法上の工夫」といった点に、課題を残したことが窺われる。

（2）2015（平成27）年度の調査結果

（1）と同様に、2015（平成27）年度のアンケート調査結果を述べていく。（1）で挙げた1から5までの調査項目に対し、2015（平成27）年度のアンケート調査の回答結果を示したものが、【表2】である。

これによると、調査項目「3. 教員の説明はわかりやすかった」について、「そう思う」「強くそう思う」という回答は、合計で8割近くの76.7%であり、それ以外の調査項目「1. シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった」「2. 使用した教材は適切であった」「4. 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた」「5. 総合的に判断してこの授業に満足している」に関してはそれぞれ、66.7%、60%、66.6%、63.3%である。ここから、2015（平成27）年度を受講学生も、前年度と同様、本授業に対して肯定的な感想を多く有していると言えよう。これに対して、「そう思わない」「全くそう思わない」という回答は3.3%（調査項目1、2）から、一番多い項目で13.3%（調査項目5）である。このように、2015（平成27）年度において、本授業

【表1】2014年度のアンケート調査結果（20名）

調査項目	1	2	3	4	5
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (5%)	1名 (5%)	0名 (0%)
2) そう思わない	3名 (15%)	3名 (15%)	1名 (5%)	1名 (5%)	1名 (5%)
3) どちらとも言えない	1名 (5%)	1名 (5%)	6名 (30%)	4名 (20%)	3名 (15%)
4) そう思う	10名 (50%)	8名 (40%)	4名 (20%)	8名 (40%)	10名 (50%)
5) 強くそう思う	6名 (30%)	8名 (40%)	8名 (40%)	6名 (30%)	6名 (30%)

【表 2】2015 年度のアンケート調査結果（30 名）

調査項目	1	2	3	4	5
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (3.3%)	0名 (0%)	0名 (0%)
2) そう思わない	1名 (3.3%)	1名 (3.3%)	2名 (6.7%)	3名 (10%)	4名 (13.3%)
3) どちらとも言えない	9名 (30%)	11名 (36.7%)	4名 (13.3%)	7名 (23.3%)	7名 (23.3%)
4) そう思う	11名 (36.7%)	9名 (30%)	12名 (40%)	13名 (43.3%)	10名 (33.3%)
5) 強くそう思う	9名 (30%)	9名 (30%)	11名 (36.7%)	7名 (23.3%)	9名 (30%)

に対して否定的な印象を抱いている受講学生は、前年度と同様、少ないことがわかる。ただし、前年度との対比で言うと、2015（平成 27）年度の結果において、「どちらとも言えない」という回答が、調査項目 1（5%→30%）、2（5%→36.7%）、4（20%→23.3%）、5（15%→23.3%）でかなり増加している。これらの調査項目の回答結果に、「そう思わない」「全くそう思わない」という否定的な回答を合わせると、それぞれ、33.3%、40%、33.3%、36.6%となる。以上の点を重視すると、2015（平成 27）年度の授業では、「シラバスと実際の授業内容との整合性」「使用教材の適切さ」「理解を促す教育方法上の工夫」「総合的な授業の満足度」といった点に、課題を残したと考えられる。

（3）2014（平成 26）年度及び 2015（平成 27）年度の調査結果

（1）（2）と同様に、2014（平成 26）年度及び 2015（平成 27）年度を併せたアンケート調査結果を述べていく。（1）で挙げた 1 から 5 までの調査項目に対し、2014（平成 26）年度及び 2015（平成 27）年度の、両年度を併せたアンケート調査結果を示したものが、【表 3】である。

これによれば、調査項目 1 から 5 までのい

れについても、「そう思う」「強くそう思う」という回答を合わせると、70%近くを占めているか（調査項目の 2 及び 4）、あるいは、70%を超えている（調査項目 1、3、5）。ここから、（1）（2）でも述べてきたように、受講学生は全体として、本授業に対して、肯定的な印象を抱いていることがわかる。これに対して、「そう思わない」「全くそう思わない」という回答は、合計して多い項目で 10%（調査項目 3、4、5）であり、少ない項目で 8%（調査項目 1、2）である。以上から、本授業に対して否定的な感想を持っている受講学生は、比較的少数であると言えよう。

ただし、（1）と（2）で見てきたように、上記 1 から 5 までのすべての調査項目に関して、「どちらとも言えない」という回答が、20%から 24%の範囲で見られる。これらの回答結果に、「そう思わない」「全くそう思わない」という回答を合わせると 30%（調査項目 3、5）、あるいは 30%を超えている（調査項目 1、2、4）。今後の調査では、「どちらとも言えない」と回答した場合、その理由などを尋ねる工夫をする必要があるのではないかと考える。

それでは次に、筆者が独自に作成し実施した、アンケート調査項目の結果を示し、考察を行っていく。

【表 3】2014 年度及び 2015 年度を併せたアンケート調査結果

調査項目	1	2	3	4	5
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	2名 (4%)	1名 (2%)	0名 (0%)
2) そう思わない	4名 (8%)	4名 (8%)	3名 (6%)	4名 (8%)	5名 (10%)
3) どちらとも言えない	10名 (20%)	12名 (24%)	10名 (20%)	11名 (22%)	10名 (20%)
4) そう思う	21名 (42%)	17名 (34%)	16名 (32%)	21名 (42%)	20名 (40%)
5) 強くそう思う	15名 (30%)	17名 (34%)	19名 (38%)	13名 (26%)	15名 (30%)

5. 学校場面ビデオ分析演習グループの授業評価結果と考察

以下では、2014（平成26）年度と2015（平成27）年度の、学校場面ビデオ分析演習グループの授業評価アンケートの結果を示し、考察を行なっていく。

（1）2014（平成26）年度の調査結果

以下の6から16までの調査項目⁽¹⁰⁾に対し、2014（平成26）年度の調査結果を示したものが、【表4】である。

《調査項目》

6. 授業のアウトラインを記した【講義メモ】等は、授業理解の点で役立った。
7. ビデオ教材は、「教職実践演習」という授業の趣旨に即しており、適切であった。
8. ビデオ分析は、学校現場同様場面演習という点で、有効であった。
9. 本演習で確認した知見等は、教育実習の際に役に立った。
10. 「教職実践演習」（「教職実践研究」）ワークシートは、授業の内容を確認し、深めることに役

立った。

11. ワークシートの読み合わせは、他の受講生の考えを知ることができ、役に立った。
12. ワークシートに基づく討論は、教職に就く際の専門的な知識等の確認に役立った。
13. 本授業をとおして、学習指導や児童指導・児童理解の専門的な知識・技術が、よく確認できた。
14. 制度上、4年次の後学期に「教職実践演習」（必修）が設定されているため、4年次にはかなり負担になる。
15. 本授業の内容は、将来、教員をめざす者にとって必要だと思う。
16. 本授業をとおして、一層、教職志望が強まった。

調査項目の6から13は大要、授業の方法や内容に関わるものである。【表4】によれば、調査項目6、7、8、10、11、12、13の回答はいずれも、「そう思う」「強くそう思う」であり、調査項目9も、ほぼ同じ回答傾向を示している。ここから、受講学生は、授業の内容や方法に対して、かなり肯定的に捉えていることがわかる。

【表4】2014年度のアンケート調査結果（6名）

調査項目	6	7	8	9	10
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (16.7%)	0名 (0%)
4) そう思う	2名 (33.3%)	2名 (33.3%)	1名 (16.7%)	3名 (50%)	2名 (33.3%)
5) 強くそう思う	4名 (66.7%)	4名 (66.7%)	5名 (83.3%)	2名 (33.3%)	4名 (66.7%)

調査項目	11	12	13	14	15
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (16.7%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (16.7%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	2名 (33.3%)	2名 (33.3%)
4) そう思う	1名 (16.7%)	2名 (33.3%)	3名 (50%)	2名 (33.3%)	2名 (33.3%)
5) 強くそう思う	5名 (83.3%)	4名 (66.7%)	3名 (50%)	0名 (0%)	2名 (33.3%)

調査項目	16
1) 全くそう思わない	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	4名 (66.7%)
4) そう思う	2名 (33.3%)
5) 強くそう思う	0名 (0%)

授業の負担度を尋ねた、調査項目「14. 制度上、4年次の後学期に『教職実践演習』（必修）が設定されているため、4年次にはかなり負担になる」について、「そう思う」33.3%に対して、「そう思わない」「全くそう思わない」は合計で33.4%である。受講学生は、4年次の後学期に設定された「教職実践演習」という授業科目を、それほど大きな負担には感じていないようである。筆者は、4年次の学生は卒業論文の作成もあり、後学期に必修として設定されている「教職実践演習」を、かなり負担に思っているのではないかと予想していたので、これは、意外な結果であった。

調査項目15及び16は、本授業の位置づけや、教職への志望状況等を尋ねたものである。調査項目「15. 本授業の内容は、将来、教員をめざす者にとって必要だと思う」に対して、「そう思う」「強くそう思う」は合わせて66.6%であり、約7割の受講生は、本授業を教職の専門性との関連で必要である、と位置づけていることがわかる。ただし、「16. 本授業をとおして、一層、教職志望が強まった」に対して、「そう思う」は33.3%、「どちらとも言えない」は66.7%である。これは、本授業が教職志望を一層強めることに効果を及ぼ

すことができなかった、というわけではなく、受講学生の多くが将来、保育士をめざしていたことと関連があるように思われる。それでは次に、2015（平成27）年度の調査結果を見ていく。

（2）2015（平成27）年度の調査結果

2014（平成26）年度の調査と同様、上で挙げた調査項目6から16に対し、2015（平成27）年度の調査結果を示したものが、【表5】である。

調査項目の6から13は概ね、授業の方法や内容についてのものである。2015（平成27）年度の調査結果は、（1）で述べてきた、2014（平成26）年度のそれと、ほぼ同じような傾向を示しているので、（1）の叙述を踏襲して述べていく。

【表5】によれば、調査項目6、7、8、10、11、12、13の回答はいずれも、「そう思う」「強くそう思う」であり、調査項目9も、ほぼ同じ回答傾向を示している。ここから、受講学生は、授業の内容や方法に対して、かなり肯定的に認識していることがわかる。

授業の負担度を尋ねた、調査項目「14. 制度上、4年次の後学期に『教職実践演習』（必修）が設定されているため、4年次にはかなり負担になる」

【表5】2015年度のアンケート調査結果（11名）

調査項目	6	7	8	9	10
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (9.1%)	0名 (0%)
4) そう思う	5名 (45.5%)	5名 (45.5%)	5名 (45.5%)	5名 (45.5%)	4名 (36.4%)
5) 強くそう思う	6名 (54.5%)	6名 (54.5%)	6名 (54.5%)	5名 (45.5%)	7名 (63.6%)

調査項目	11	12	13	14	15
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (9.1%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	7名 (63.6%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (9.1%)	0名 (0%)
4) そう思う	2名 (18.2%)	5名 (45.5%)	6名 (54.5%)	2名 (18.2%)	6名 (54.5%)
5) 強くそう思う	9名 (81.8%)	6名 (54.5%)	5名 (45.5%)	0名 (0%)	5名 (45.5%)

調査項目	16
1) 全くそう思わない	0名 (0%)
2) そう思わない	1名 (9.1%)
3) どちらとも言えない	5名 (45.5%)
4) そう思う	5名 (45.5%)
5) 強くそう思う	0名 (0%)

について、「そう思う」18.2%に対して、「そう
思わない」「全くそう思わない」は合計で81.8%
である。大半の受講学生は、4年次の後学期に設
定された「教職実践演習」という授業科目を、あ
まり負担には感じていないと言える。「教職実践
演習」は、4年次の後学期に必修として設定され
ているため、受講学生はかなり負担に感じている
のではないかと筆者は予想していた。しかしな
がら、昨年度の調査に引き続き、「あまり負担に
は感じていない」という予想外の結果になった。

調査項目15及び16は、本授業の位置づけや、
教職への志望状況等について尋ねたものである。
調査項目「15. 本授業の内容は、将来、教員を
めざす者にとって必要だと思う」に対して、受講
学生はいずれも「そう思う」54.5%、「強くそう
思う」45.5%と回答している。受講生は全員、本
授業を教職の専門性との関連で必要である、と位
置づけていることがわかる。このように受講学生
は、本授業を非常に肯定的に捉えていることがわ
かるが、「16. 本授業をとおして、一層、教職志
望が強まった」に対して、「そう思う」45.5%、「ど
ちらとも言えない」45.5%であり、「そう思わな

い」9.1%である。これは昨年度と同様、受講学
生11名のうち、保育士をめざす学生が6名であ
り、小学校教員志望者が少ないことと関連してい
ると考えられる。

（3）2014（平成26）年度及び2015（平成27） 年度を併せた調査結果

最後に、参考までに、2014（平成26）年度の
調査結果と2015（平成27）年度のそれを合計
して示してみる。すでに（1）と（2）で述べて
きたように、調査結果は両年度とも、同じ傾向を
示しているため、論述は省略した。

おわりに

以上、筆者の所属教室である、子ども地域教育
コースの「教職実践演習」に対する取り組みと、
4年次学生の「教職実践演習」に対する授業評価
を見てきた。それに基づき、以下、得られた知見
を挙げてみる。まず、「教職実践演習」の取り組
みをとおして得られた知見を述べてみると、以下
のようになる。

【表6】2014年度及び2015年度を併せたアンケート調査結果（17名）

調査項目	6	7	8	9	10
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	2名 (11.8%)	0名 (0%)
4) そう思う	7名 (41.2%)	7名 (41.2%)	6名 (35.3%)	8名 (47.1%)	6名 (35.3%)
5) 強くそう思う	10名 (58.8%)	10名 (58.8%)	11名 (64.7%)	7名 (41.2%)	11名 (64.7%)

調査項目	11	12	13	14	15
1) 全くそう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	2名 (11.8%)	0名 (0%)
2) そう思わない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	8名 (47.1%)	0名 (0%)
3) どちらとも言えない	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	3名 (17.6%)	2名 (11.8%)
4) そう思う	3名 (17.6%)	7名 (41.2%)	9名 (52.9%)	4名 (23.5%)	8名 (47.1%)
5) 強くそう思う	14名 (82.4%)	10名 (58.8%)	8名 (47.1%)	0名 (0%)	7名 (41.2%)

調査項目	16
1) 全くそう思わない	0名 (0%)
2) そう思わない	1名 (5.9%)
3) どちらとも言えない	9名 (52.9%)
4) そう思う	7名 (41.2%)
5) 強くそう思う	0名 (0%)

・筆者の所属教室は、学生定員が30名という大所帯であるため、「教職実践演習」をスタッフ全員で取り組んでいる。

・その際、「教職実践演習」は、その授業科目設定の趣旨や、教育効果といった観点から、受講学生をいくつかのグループに分け、提供されている。

・「教職実践演習」のコーディネーター役は、4年次の指導教員が務め、前学期の「教職実践研究」の第1回目及び第2回目の授業を担当している。第3回目以降の授業は、編成されたグループごとに行なわれる。

・「教職実践演習」の最後の授業では、全体発表会が行なわれ、それぞれのグループで学んできた知見を共有することができる。

次に、受講学生の授業評価アンケート結果から、抽出された知見を挙げてみる。

・筆者の所属教室の4年次学生は、全体として見ると、筆者らが行なった「教職実践演習」の授業を肯定的に評価していると言える。

・学校場面ビデオ分析演習グループの授業評価結果によれば、4年次の受講学生は、後学期に設定されている「教職実践演習」を、それほど大きな負担には感じていないようである。筆者は、4年次の後学期には「卒業研究」があるため、「教職実践演習」は、4年次学生にとって、かなり負担になっているのではないかと予想していた。しかしながら、学生は、「教職実践演習」の履修に対して、あまり負担に思っていないようである。

本稿は、「授業実践報告」というタイトルを付している。しかしながら、本稿では、筆者が担当した、学校場面ビデオ分析演習グループの、具体的な授業実践の反映である、受講学生に課したワークシートの分析を行なうことができなかった。今後の課題としたい。

【注】

- (1) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」。筆者は、この資料について、文部科学省のH.P.のものをを用いている。
- (2) 「教職実践演習」に関して、なぜこのような授業提供方法を採用したのかについての経緯は、ここでは触れていない。
- (3) 例えば、『琉球大学学生便覧 平成27年度版』2015年、230-231頁を参照。
- (4) 例えば、『琉球大学授業時間配当表 平成27年度(2015)後学期』2015年、121-122頁を参照。
- (5) ここの記述は、子ども地域教育コースにおける、2015(平成27)年度前学期の「教職実践研究」開講に当たって作成された資料を基にしている。この資料には大要、グループごとの演習名、授業担当者、学生定員、受入要件、第3回目の授業日程、活動概要が述べられている。所属学生はこの資料をもとにして、グループ選択を行なう。
- (6) 琉球大学H.P.より引用。筆者が所属する、子ども地域教育コースのシラバスは、前学期が「教職実践研究03組」、後学期が「教職実践演習03組」である。
- (7) 例えば、「教職実践研究」ワークシートNo.1の課題は、次のものである。
【課題】 斎藤喜博さんの授業実践(体育)から、あなたが新しく学んだこと、発見したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどを述べてください。
- (8) 筆者が所属する教室ではこれまで、2013(平成25)年度に「教職実践演習」が実施に移された後、「教職実践演習」の最後の授業において、発表会が行なわれてきた。2015(平成27)年度に行なわれた発表会では、「演習1 教育実習生 研究授業検討会演習」、「演習2 学校場面ビデオ分析演習」、「演習3 学社融合実践演習」という三つに編成されたグループがそれぞれ、本授業でどのようなことを学び、教職の専門性に関わるどういった知見などの確認を行ってきたかが発表された。
- (9) アンケート調査票については、別紙資料を参照のこと。
- (10) アンケート調査票については、別紙資料を参照のこと。

【資料】

「教職実践演習」授業評価アンケート

2015.12.11【金】

○担当者・授業科目：子ども地域教育コース全教員「教職実践演習」3組

○科目番号：教職491

○回答は、項目A（全員回答）及び項目B（学校場面ビデオ分析演習グループのみ回答：廣瀬・佐久間担当）については、すべて、該当するもの一つに○をつけてください。項目C（全員回答）については、文章で自由に記述してください。

A. 授業方法・内容及び総合評価について

1. シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
2. 使用した教材は適切であった。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
3. 教員の説明はわかりやすかった。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
4. 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
5. 総合的に判断してこの授業に満足している。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う

B. 各教員（学校場面ビデオ分析演習グループ：廣瀬・佐久間）による独自の授業評価

6. 授業のアウトラインを記した【講義メモ】等は、授業理解の点で役立った。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
7. ビデオ教材は、「教職実践演習」という授業の趣旨に即しており、適切であった。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
8. ビデオ分析は、学校現場同様場面演習という点で、有効であった。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う
9. 本演習で確認した知見等は、教育実習の際に役に立った。
 - 1) 全くそう思わない
 - 2) そう思わない
 - 3) どちらとも言えない
 - 4) そう思う
 - 5) 強くそう思う

10. 「教職実践演習」(「教職実践研究」) ワークシートは、授業の内容を確認し、深めることに役立った。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
11. ワークシートの読み合わせは、他の受講生の考えを知ることができ、役に立った。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
12. ワークシートに基づく討論は、教職に就く際の専門的な知識等の確認に役立った。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
13. 本授業をとおして、学習指導や児童指導・児童理解の専門的な知識・技術が、よく確認できた。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
14. 制度上、4年次の後学期に「教職実践演習」(必修)が設定されているため、4年次にはかなり負担になる。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
15. 本授業の内容は、将来、教員をめざす者にとって必要だと思う。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う
16. 本授業をとおして、一層、教職志望が強まった。
- 1) 全くそう思わない 2) そう思わない 3) どちらとも言えない
4) そう思う 5) 強くそう思う

C. この授業で特に良かった点、また印象に残った点があれば、自由に書いてください。

ご協力、どうもありがとうございました。